

第3章 依存症相談支援ケースと連携

1 依存症相談支援ケース（イメージ）

1 アルコール依存症

56歳男性。以前より飲酒はあったが、特に中間管理職となってからは仕事のストレスからか飲酒量が増え、休日は朝から飲酒するようになる。家族がお酒を飲まないようにと言っても聞かず、酩酊して家族へ暴言を吐くことがあり、翌朝は起きられず、仕事を休むこともみられるようになった。会社の健康診断で肝臓の数値が高く、医療機関（内科）を受診。飲酒が止められないと話したところ、アルコール依存症の可能性があると言われ精神科受診を勧められたが、本人は「いつでも止められる」と言って受診しなかった。そこで家族が保健所に相談し、心理教育を受け断酒会を勧められた。家族が断酒会に通いアドバイスを受け、本人への対応を工夫していたところ、ある時家族の誘いに乗って依存症専門医療機関（精神科）を妻とともに受診。アルコール依存外来につながり、本人は薬物療法を受けるとともに、妻は家族教室へ参加。本人も治療だけではなく月1回断酒会へも参加し、回復を目指している。



【Point】依存症は否認の病と言われ、本人がすぐに医療機関を受診することは難しいかもしれません。家族が相談機関とつながり、アルコール依存症への理解を深め、本人をアルコール専門外来や依存症専門医療機関、断酒会等につないでいきましょう。

2 薬物依存症

32歳男性。18歳頃から友人に誘われ軽い気持ちで覚せい剤を使用するようになり逮捕され執行猶予となる。その後は、真面目に仕事をし、結婚をして一児をもうける。しばらく、覚せい剤を使用しない生活を送っていたが、仕事の疲れやストレスから再び覚せい剤を使用するようになってしまった（スリップ）。覚せい剤を使用すると疲れやストレスが吹っ飛び、繰り返し使用するようになった。



覚せい剤使用で再逮捕されることになり、妻とは離婚。出所後は回復支援施設DARC（ダルク）へ入所し、依存症回復プログラムを受けながら、依存症専門医療機関へ通院し、回復を目指している。

【Point】回復過程で再使用（スリップ）することは起きることです。そのまま放置せず引き金や渴望への対処等、再発のリスクを軽減することが大切です。回復支援施設DARC（ダルク）や依存症専門医療機関にて依存症回復プログラム・治療を継続していくことが望まれます。

3 市販薬依存

18歳女性。中学時代よりいじめに遭い、学校を欠席、早退することがあった。高校へ進学するが、馴染めず不登校となり引きこもり状態となる。単位取得ができず、1年で退学となる。退学後は「死にたい」と訴え、リストカットやドラッグストアで市販薬を購入し、服用することが繰り返し見られるようになった。ある日、市販薬をオーバードーズして意識朦朧となっている本人を、母親が見つけ救急搬送となる。救急搬送された病院より、精神科病院への受診と精神保健福祉センターへの相談を勧められた。本人は通院により薬物療法・カウンセリングを受けるとともに、母親は家族教室へ参加。徐々に母親と食事や買い物へ出かけることができるようになり、不安定さはあるもののリストカットや市販薬のオーバードーズは見られなくなり、将来はペットに関わる仕事がしたいと話すまでに回復してきている。



【Point】「オーバードーズ」とは、かぜ薬や咳止め薬などを、症状を抑えるためではなく、感覚や気持ちに変化を起こすために大量に服用することです。市販薬依存は、背景にある心の問題について、精神保健福祉センターへの相談や精神科医療機関に受診するなどして回復を図る必要があります。不安を抱える家族への支援も大切です。

4 ギャンブル依存症

26歳男性。大学時代よりパチンコはやっていたが、小遣い内であった。就職後、オンライン競馬をやるようになり、給料だけでは足りずキャッシングをして注ぎ込むようになった。負けるとまたギャンブルで取り返そうと再びギャンブルをやった。借金が多額となり両親に相談。本人は「もうやらない」と言い、親が借金の肩代わりをした（イネーブリング）。ところが1年も経たないうちに、督促状が届き、再びギャンブルをやっていること、借金があることが発覚。両親はギャンブル依存症ではと思い、精神保健福祉センターへ相談。本人は依存症回復プログラムへ参加。両親は家族教室へ参加となった。借金に関しては、司法書士会へ相談し債務整理手続きを進めている。



【Point】借金問題への対応だけが先行してしまうと、根本であるギャンブル依存症の解決にはならないことがあります。本人の自立を支え、家族の理解を深めましょう。家族が家族教室等へつながり、本人と距離をとれるようになることが大切です。

5 ゲーム障害

16歳高校生。高校入学後、ゲームにのめり込むようになり、朝起きられず学校を遅刻、休むことが見られるようになった。ボーッとして意欲がなく勉強についていけず成績も落ちた。母親は、夜遅くまでゲームをしないで学校へ行くようにと注意するが、イライラして「うるさい」とキレて物を壊すことが見られるようになる。小遣いも全てゲームの課金に費やし、そのうち昼夜逆転となり不登校となってしまった。保護者がスクールカウンセラーへ相談したところ、精神保健福祉センターを紹介された。幼少時より友人関係のトラブルが多く、言語コミュニケーション、集団行動が苦手なところがあり、勧められて医療機関を受診。発達障害の特性があることがわかり、本人・家族が心理教育を受け、医師との信頼関係に基づいて、ゲーム時間を減らし生活リズムの改善に取り組んだ。通信制高校へ再入学後は、本人が好きな鉄道の友人もでき、一緒に写真を撮りに出かけるようになっている（代替行動）



【Point】友人関係や集団不適応から不登校となりゲームに依存していくことがあります。単にゲームをやめさせようとするとう家族関係が悪化し悪循環となります。ゲーム依存の治療だけでなく本人が自己発揮できる場や自己肯定感を持てることが大切です。

2 他機関・団体につなぐときに大切にしたいこと

受容・共感的な姿勢で本人・家族と対話を重ね一緒に考えていき、他機関・団体につないだ後も自機関・団体で対応できることは引き続き支援するなど、各機関・団体が丁寧に関わることで、切れ目のない支援を目指していくことが大切です。自機関・団体から他機関・団体につなぐ際に、以下の3つのことを共通認識として大切にすることで、本人・家族が必要な支援が途切れることを防ぐとともに、機関・団体間の連携強化にもつながります。

●目の前の困りごとだけでなく、その背景に潜んでいる課題などにも焦点を当てること

最初から本人が相談に来ることは稀で、多くの場合、まず家族が相談に来ます。家族は誰にも相談することができず、心身ともに疲弊し、混乱して状況を客観的に理解することが難しい状態で来所する場合も多々あります。困り感に寄り添い家族の支援を行いましょう。

本人が来談した場合は、主訴や課題などを慎重に聴き、依存症の状態や動機づけの程度、その背景に潜んでいる課題などのアセスメントを踏まえ、どのような優先順位で支援を実施するのか、どのようなアプローチを取るかを慎重に判断しましょう。

●継続的な関わりタイミングを見極め丁寧につなぐこと

多くの場合、本人は依存症を否認したり支援を拒否するなど、動機づけが低い状態にあると思います。治療に対する前向きな姿勢を引き出すためには、継続的な関係性を作っていくことが必要です。依存症の問題ばかりに焦点化せず、他の課題への対応を優先することも考えられます。

また、本人を専門機関や治療機関につなげるためにはタイミングが非常に重要です。本人が反省しているときや助けを求めてきたときなどのタイミングで適切な治療につなげることが大切です。

●つないだ後のフォローも大切にして、連携して支援すること

依存症の本人は多様な生きづらさを抱えていることがあります。また、依存症に伴い、社会的・身体的・心理的に様々な問題を抱え込んでいるかもしれません。加えて依存症の段階によって本人の状態が異なり両価性を持つため、時として本人の発言に矛盾が生じます。そのため、本人が抱える問題や状態などの必要に応じて関係機関・団体と連携をとるとともに、多角的に本人の情報を収集していきましょう。

また、家族も依存症の段階に応じて状況が異なり、家族構成によっても必要となる支援も異なります。家族のニーズに応じて様々な関係機関・団体と連携をとることが求められます。

適切な機関・団体につなげることは大切ですが、つなげたから終わりではなく、各機関・団体がそれぞれの役割を確認しながら支援するという視点も大切です。

また、個人情報の取り扱いに留意して、つなげた後もしばらくは支援を継続するなど丁寧な関わりが必要です。

個人情報の取り扱いについて

●他機関・団体との連携は大切ですが、個人情報の取り扱いには注意が必要です。本人や家族から同意を得て、情報共有・情報提供するようにしましょう。

